2011.3.4(金)
(H.23)
上越タイムス

小学校英語活動の今後は？ ⑲

遠藤 由明

教室を開設してから三十七年目になります。始めたばかりのころはずいぶん批判されました。「日本語も満足でないのに」「学校で教えないような無駄なことをなぜ？」「受験英語を勉強していれば十分！」…。この四十年足らずの間に私の持論「英語は世界をつないでくれる便利な道具」「『英語を』でなく『英語で』コミュニケーションできるように」が今では常識となりつつあります。

それでもまだ誤解がたくさん目につきます。CRT（学級担任）セミナーで指導させていただいて痛感した最たるものは「CRT自身の発音に対する卑下」です。

興味深い実験があります。日本の教養人の英語はほかのアジア諸国の人によって約七五％理解されましたが、アメリカ人の英語は約五五％の理解にとどまりました。国連などの国際会議では英米人が壇上に立つと一斉に通訳用のヘッドホンをつけ始めるというエピソードは有名です。

小学校だからできること

つまり、母語話者の英語は絶対的なモデルでないことを意味します。三単現のsの脱落や過去形の不規則変化を間違えても、その場の空気で理解されるならそれは誤りではなく個性または違いとして受け入れられるということです。

もちろん、独りよがりの英語ではよい道具とはいえません。お手本としての母語話者の英語は必要です。小学校英語活動のなかでいえば、CRTは過度にALTのような母語話者の英語をまねようとしなくてよい、といいたいのです。「発音や英文の正確さではALTにとてもかなわないので教案づくりも進行もALTに任せておこう」という受け身の姿勢がCRTの心に巣食っている気がしてなりません。「日本人英語としての許容範囲」に自信を持ってCRTの思いや考えを授業のなかで展開してほしいのです。多少のルール違反を笑い飛ばせる小学生だからできることの一つです。

ハロウィーン、クリスマス、バレンタイン…のように異文化を理解し親しむことも大切ですが、海外研修等での外国友人さんたちは、郷土の文化や自分の学校生活などの紹介の方により関心を持ってくれるのですから。CRT自身が英語という道具を磨き続ける意欲がある限り、ALTは学習のためのアシスタントであるべきで、わざわざALTに巨費を投じて雇う必要はないと私は考えます。

（LLシホヤ新井教室代表）